グリーン教国の形式と内容と冒頭と動機

エリー

登場人物

名前が決まっている登場人物

ボタン：主人公の女王。
ハシバミ：ボタンの幼馴染。ボタンより年上。商人の子ども。
マロニエ：ボタンの幼馴染。ボタンより年上。僧兵の子ども。
シラカバ：賢者ナナカマドの貧民街での名前。
ヤドリギ：商人になったハシバミの従者。
ヤナギ：王。ボタンの父。
ヒナギク：王妃。ボタンの母。

グリーン教国の形式と内容

20171109のツイートのコピー

たとえば、民主主義の国で、「議論を尽くすべきだ！」に反対すると、国の体制そのものに反対することになる。専制とか、そういうのをすすめることになる。
グリーン教国は王政だが、進行役みたいな立場で、決定は話し合いで行われる。

では、どう話し合うのか？
知識がある人が選ばれて少数で話し合うのか、全員参加で決定するのか？
30人くらいなら全員参加で知ってることや、望むことを言い合って、共通認識を作り、今回はこうする、に納得して従うことが期待できる。
しかし、一億以上いたら、その方法は難しい。多数決を選ぶ。

グリーン教国は5人の話し合いをメインにする予定なんだけども、切り口は、「分からない相手が、分かるようになって、どう自分で答えを発見させるか？」で、賢者ナナカマドはお釈迦様みたいにたとえ話や質問で考える材料を提供する。
ここまでは決定事項。

ナナカマドは強く生きて弱さに絶望して、一度は死を覚悟したが、存在を肯定され、自らも相手の存在を肯定し、愛し愛される関係を得たことで、弱い自分を受け入れ再び生きようとする。ちゃんと表現できてないけど、そういうことが書きたかった(>_<)
※ブクログに「グリーン教国０章：賢者ナナカマド」として登録。

ボタンは弱くて世話されていて、周りに支えながら王族としての勤めを果たそうとしている。
マロニエは強く、ボタンを護衛する存在。
ボタンはマロニエに憧れ、あんな風になりたいし、なれるかもしれないと幼少期を過ごす。
しかし、無理だとつきつけられて混乱に陥る。

ハシバミは、ボタンを楽しませてくれる存在で、弱い自分を隠さない。だから、ボタンは最初、バカにしていた。弱音なんて吐いたって誰も助けてくれない。頑張るしかない。そんな風に心配する対象。
弱いと分かって混乱するボタンが怒りをぶつけた相手。

ヤドリギは、ハシバミの従者で、できるのにやりたくない。
できないけどやりたいボタンとは正反対。
弱いボタンには、気を使って誰も何も要求しないが、ヤドリギだけは、平気でお願いしてくる。

かわいいような、迷惑なような、猫っぽい存在。

ナナカマド、ボタン、マロニエ、ハシバミ、ヤドリギで、様々な問題を話し合う。ハシバミは商人で、従者のヤドリギと国中を旅しているから、話題を持ってきてくれる。マロニエは僧兵？だから、理想をとく。その間に立って悩むボタン。ヒントをくれるナナカマド。

ここまでは、形式。

内容の中心は、「生きているだけで素晴らしい！」とあらゆる存在を肯定するグリーン教の教義にまつわること。
自分や他人の存在を肯定することを求めるから、自殺や殺人は重罪。死んではいけない、から発展して、寿命をまっとうしないものは罪深い、と誤った考えが広まる。

ボタンは弱くて生きることが大変だが、十分な世話を受けて、好きなことをして、幸せに暮らしている。
ナナカマドは、貧民街で、話術で娯楽を提供して、なんとか暮らしている。
ではもし、ナナカマドのように生活の糧もなく貧しいなら？
助ける人が必要だ。

死なないようにする、は可能かもしれない。しかし、好きなことをして、幸せを感じられるようにする、は可能だろうか？

ボタンは、世話されて、自分は役割を免除されて、昼寝をしたり、好きなことをしたり、自由な時間を楽しんでいる。
それは、王族という特権的立場にあるからだ。
すべての苦しい人を、ボタンと同じ特権的立場に置くことはできるだろうか？

なにができて、なにができないのか？
そこを話し合う物語が書けたら、面白いかなーって思うんだけども、結論を出して「こうすべき！」と主張するというより、ああだったらこうなって、こうだったらああなって、という「バランスの話」になると思う。

昨日書いたノートを整理するとそんな感じかな。
頑張れ、わたし(^-^)
焦らず、飽きず、諦めず、ゆっくり行こう！

冒頭

〇城の運動場

　　砂が敷き詰められた庭のトラックに沿って走る子どものボタン。

　　今にも倒れそう。

　　追い抜いていく子どものハシバミと子どものマロニエ。

ボタンの声「待って！　わたしを置いていかないで！」

　　ハシバミとマロニエを追いかえるボタン。

　　それを屋根のある場所から座って見守る若い王ヤナギと若い王妃ヒナギク。

　　どんどん離れていくハシバミとマロニエ。

ヤナギ「またボタンが追い抜かれておる。２周遅れだ」

ヒナギク「男の子と一緒では難しいでしょう。年も上なんですから」

ヤナギ「だが王家の娘だ。国民を助けるのが務めだ。これぐらいできなくてどうする」

　　立ち上がる王ヤナギ。

ヤナギ「ボタン、遅れるな！」

　　王さまを振り返るボタン。

ボタンの声「そんなこと分かっている！」

　　転ぶボタン。前を走る二人に手を伸ばす。

　　気づかず走り続けるマロニエ。

　　立ち止り、振り返るハシバミ。

　　立ち上がり、再び走り出すボタン。とても苦しそう。

　　座り込むハシバミ。

ヤナギ「どうしたのだハシバミ？」

ハシバミ「足をつってしまいました。今日の持久走はここまでにしてください」

ヤナギ「そんなことでは弱きを助ける立派な信者にはなれないぞ」

ハシバミ「ご期待に添えず申し訳ないです」

　　また転ぶボタン。

ヒナギク「王さま、ボタンも疲れているようですし、今日は終わりにしてはいかかですか？」

　　立ち上がろうとしてまた転ぶボタン。

王「仕方がない。いいだろう。やめてよし。終わりにせよ！」

　　しかし走ることをやめないマロニエ。

ボタンの声「王さまがなにか言っている。苦しくて聞こえない。きっともっと頑張れっていってるんだわ」

　　必死に立ち上がろうとするが座り込んでしまうボタン。

　　ハシバミが近づき、抱きとめる。

ボタン「なによ。まだわたしは負けてないんだから！」

ハシバミ「あんよが痛いの。お世話してよ～」

ボタン「だらしないわね。まだ１０周終わってないでしょ！」
ハシバミ「痛い痛いのぼくをほっておくの？」
ボタン「しょうがないな。でもわたしは走れたからね！」
ハシバミ「分かっている。ほんとボタンは負けず嫌いなんだから」
　　一周まわってマロニエが来る。
マロニエ「俺は俺の目標を曲げたくない。予定通りあと５周走る。ハシバミのことはボタンに任せる」
ボタン「分かった。頑張って」
　　ボタンが伸ばした手が空を切る。
ボタンの声「マロニエのように強くなりたい！」
　　前方だけを見つめ走り去るマロニエ。
　　ハシバミを振り返り、怒った顔をするボタン。
ボタン「もう救護室に行くわよ～！！！」
ハシバミ「はいはい～」
　　ボタンの肩に手を置き、歩き出すハシバミ。
　　走る続けるマロニエを振り返るボタン。
　　そんなボタンの横顔を見つめるハシバミ。

〇救護室

　　ベッドに座っている大人になったボタン。

　　医者が、ボタンのまぶたを抑える。

医者「まぶたを開けようとしてください」

ボタン「開けられません！」

　　ヤナギとヒナギクとマロニエとハシバミが入ってくる。

　　ボタンから離れ、王さまに頭を下げる医者。

ヤナギ「診察を続けよ」

　　医者が鞄から注射器を取りだし、ボタンの肩に打つ。

　　驚くボタン。

医者「体が軽いでしょう？　重さを感じない。多くの人はその状態が普通で鎧を着て動くような辛さを感じません。無理をしなくても自然に動ける。動き過ぎたからといって、下痢や呼吸困難の心配をしなくていい。ボタンさまは普通の状態ではないのです。休息が必要なのです。無理をなさらないでください。注射で体を軽く感じさせることはできますが、動けるようにはなりません」

ヤナギ「間違いないのか？」

医者「どうやら進行性の病気ではないようですが、極端に回復力が弱く、筋肉を動かす物質が不足するのです。そのためコントロールを失ってしまう。下痢や呼吸困難など他人に分かる症状以外にも異常は起きているはずです。足の付け根が痛むとか、見えづらいとか」

ヤナギ「なぜ言わなかったのだ！　知っていれば無理をさせなかったものを」

医者「ボタンさまにとって悪い状態が日常ですから気づかなかったのでしょう。これからは疲れて寝込むのではなく、よく寝て体が軽い状態の時だけ動くようにするとよいでしょう」

ヒナギク「辛かっただろうに。これからは好きなことだけすればいいのよ。なんの心配もいりません」

　　ボタンの肩に手を置くヒナギク。

　　顔を伏せ、布団を強く握りるボタン。

〇城の運動場

　　ハシバミとマロニエが走っている。

　　屋根のある場所で座って見守るボタン。

　　同時にゴールしたハシバミとマロニエ。

　　拍手を送るボタン。

　　座り込むハシバミ。

　　ボタンの方に歩いてくるマロニエ。

ボタン「お疲れさま」

マロニエ「ボタンさまこそお疲れではないですか？　休まれてはどうですか？」
ボタン「走れなくても、せめて応援くらいしたいじゃない」
マロニエ「体を使うことはわたくしどもに任せて、ボタンさまはボタンさまにしかできないことをしてください」
ボタン「そうね。マロニエの言う通り。わたしが見ていたってどうなるものでもないもの。できることを探す。大丈夫、きっと見つかるわ」
マロニエ「ボタンさまならきっと自分らしい生き方を見つけられます。俺は信じています」
ボタン「ありがとう。頑張る」
　　立ち去るマロニエ。
　　うつむき顔を隠すボタン。
　　ハシバミが近づいていくる。
　　ボタンの嗚咽が漏れる。
ハシバミ「どうしたの？　辛いの？」
ボタン「辛くなんかない！」
ハシバミ「それならいいけど、ぼくは動いてもなんともないからボタンのこと分からなくてごめんね」
　　涙でいっぱいの顔を上げて、ハシバミを睨み付けるボタン。
ボタン「分かって欲しいなんて言ってない！　かわいそうだと思われたくない！　いいえ、役に立たないやつだってはっきり言えばいい。生きていたって意味なんてないって思っているくせに！」
ハシバミ「ぼくはボタンがいてくれて嬉しいよ。愛しているんだ」
ボタン「バカじゃないの？　愛なんて何にも役に立たない。何も変わらない。何もできない」
ハシバミ「そうだ。ぼくには何にもできない。無力だ。でも僕はボタンに生きていて欲しいと思っている。それだけは忘れないで」
ボタン「グリーン教の第一教義は生きているだけで素晴らしいだもんね。ご立派な信者ですこと！」
　　涙をふいて立ち去ろうとするボタン。
　　ボタンを引き止め、額にキスをするハシバミ。
ボタン「もう小さな子どもじゃない。あやそうとするのはやめてよ！」
ハシバミ「教義なんて知らない。僕はボタンが幸せならいいんだ」
ボタン「みんなを考えず一人を思うのは悪い考えよ！」
ハシバミ「みんななんか知らない。正しさなんかどうでもいい。ボタンがぼくを好きで、ぼくもボタンが好きで、それがすべてであとはなんにもいらない」
ボタン「それは悪い信者よ。正しい信者は、間違いを正す。そして、正しい道だけが幸せにつながる！　わたしにはもう閉ざされた道だけれども」
ハシバミ「それならぼくは、正しいことができない弱いボタンの味方でいたい。神に逆らい悪魔になる」

ボタン「なんてこというの？　愚かだわ。でも分からない。生きているだけで素晴らしいなら、正しいことができなくても生き続けるべき。でも鍛えるのをやめてすきなだけ休んでよいわたしは全然苦労なんてしてない。楽をしている。本当に全然不幸じゃないのよ。むしろ好きな本を読む時間が増えて幸せなくらい。でもそれはわたしが王族で特権的な立ち場にあるから。平民に生まれたら貧民街に捨てられていたと思う。シラカバのように」
ハシバミ「ぼくは捨てたりしない」
ボタン「それはあなたも特権的な立ち場にいるから言えることよ。何も持たなければ、他人の面倒をみる余裕はない」
ハシバミ「なにもできないなら貧民街についていく」
ボタン「ついてきてくれる人もいなくて、一人ぼっちで放り出されたらどうしたらいいの？　生きているだけで素晴らしいと教えるなら、生きられるようにすべきじゃないの？」
ハシバミ「ボタンはいつでも自分より他人なんだね」
ボタン「当然。わたしは王家の人間なんだもの。自分のことより国民を第一に考える」
　　きりっとした表情のボタン。
ハシバミ「いつものボタンに戻ったみたいだね」
ボタン「弱いわたしは強くなることはできない。体はどうにもならない。でも人に頼んで様子を聞くことで、国民の様子を知ることはできる。知ったことを広めて、どうすべきか考えることこそ弱いわたしでもできることじゃないかしら？」
ハシバミ「それなら僕が見てくる。これから商人として全国を旅するのだから適任だ」
ボタン「貧しい地域は危険なのよ。ハシバミは弱いじゃない！」
ハシバミ「力に力でぶつかればね。商人には商人のやり方がある」
ボタン「そこまでいうならハシバミを信じる。わたしのために弱い人がどうしているのか見てきてちょうだい」
ハシバミ「何にかえても！」
　　おどけて大げさに挨拶するハシバミにつられて笑うボタン。
ボタンの声「わたしにはまだやれることがある。あきらめない！」
　　手を差し出すハシバミ。
　　ハシバミの手に自分の手を重ねるボタン。
　　手をつないで歩き出すボタンとハシバミ。

争点

　ボタンの子ども時代は、他には「シラカバの噂を聞いて、貧民街にお話を聞きに行く」をエピソードに加えたい。
　大人になって、ボタンが動けなくなった時、シラカバに城まで来てもらう予定。
　報告を聞いたボタンたちが、みんなでいろいろ話し合うところが、一番の見せ場。「弱い人をどこまで、どういう支援ができるか？」みたいな話になる予定。

　「死なないように最低限の支援をする」は計画できるからできるかもしれない。でも「好きなことをする自由を認める」となったら計画できないから難しくなる。
　自由もなくただ生かされているだけでは、放置されて死んだ方がましってなるかもしれない。認められることと、認められないことを仕分けする必要があると思う。

　ボタンが医者に言われたことは、本当にわたしが医者に言われたこと。肩に注射を打たれた。
　原因と対処は経験から自分で気づいたことだから、本当かどうかは分からない。

　起きていられるかどうか分からなくて、予定があると不安でしょうがなかったけど、事前に休むようにしたら、予定が立つようになった。
　予定に合わせて休養を取るから、用事はなんとか無事に過ごせてきた。
　しかし、日常は油断するので、知らない間に疲れがたまってしまう。

　最近、今まで平気だったことができなくなって、どうなることかと思ったけれども、活動する時間を減らしたら、体が重くて起きられない状態から抜け出せた。
　しかし、前より確実に悪くなっている。もし、寝ているだけでも痛くて、糞尿も垂れ流して自分で始末できず、世話を受けるようになったならと思うと不安で仕方がない。お金の心配ももちろんあるけど、精神的に耐えられるか心配。生きる意欲を失いそう、
　でも、その運命は変えられそうにない。すでにご飯も、洗髪も自分ではしてない。世話を受ける運命が変えられないものならば、世話を受ける自分を肯定して、苦痛の中でも幸せを感じられるようになりたいのかもしれない。だから、グリーン教の第一教義が生きているだけで素晴らしいなのかもしれない。

　自分で自分を認めることは、誰もが望むことだけど、健康で役立っている人は役立っていることで認めやすい。寝てばかりで人の世話になっている人が、それでも生きていることは素晴らしいと言うのは、簡単ではない。

　ボタンは王族だから弱くても十分な世話を受けて、好きなことをして楽しく暮らしている。
でも、王族だからこそ、自分のことで満足しないで、国民に目を向けて、自分と同じ状況の人が

どうしているだろうかと考え、知ろうとする。弱者へのそのまなざしを、ハシバミは共有してくれる。

　では、自制心をもたず、弱いことを武器にして、他人を支配しようとする人が現れたなら？
　そういう人を排除して、ありがたがって支援を受ける人だけに手をさしのべたら不公平だと思う。だって、本当に弱くて辛い立場にある人って、自分勝手で心が狭い人なんだから。

　ただ優しくするだけでは解決しない。いい・悪いをはっきり線引きする厳しい態度も必要。だから、何を認めて、何を認めないのか、はっきり言葉で示せるようになる必要がある。

　それを現実ではなく、物語の中でするだけでも、難しいことには変わりない。勇気も必要だ。わたしには足りないものがいっぱいで今すぐには叶わないが、求め続けていいたいと思う。

　そういう気持ちが、悪化していく中でも生きる希望になっている。探求し続けたいことがあるのって、生きていることは素晴らしい！と言える動機になると思う。

　そういうものがあるだけで幸せで、何も見つからない人が多いのだと知識としては知っているが、わたしは「やりたい！」と思うことがなかったことはないので実感は湧かない。

　わたしはやりたいことは次々見つかるのだけど、挫折ばかりで結果を出したことがない。だから、成功しているのに満足しない人を見ると贅沢に思えた。しかし、人から望まれることと、自分が望むことは別なのかもしれない。
　自分が「やりたい！」と思ったことだからこそ支えになるのかもしれない。

　好きでやっていることでも、やっぱり伝えたいと思う相手は必要だ。
　聞いて欲しいと思う人はいる。
　興味を持てることがないのも辛いけど、聞いて欲しい相手がいないのも辛いと思う。

　ボタンは、自分より弱い立場にある人に関心を持ち、その話をする相手を得たから、立ち直れたのだと思う。

　前半に「ボタンがなぜそれをしようと思ったのか？」を書いて、中盤に「報告を聞いて話し合う」をして、最後に「理想を持つ」まで書けたらいいなと思う。
　「なぜ保護区と自由区と管理区に分かれた世界を理想としたのか？」にこたえる「はじまりの話」になったらいいなと思う。